

山田洋次監督の職業訓練観

—「学校Ⅲ」をめぐる発言から—

職業能力開発大学校 田中 萬年

10月17日に封切られた「学校Ⅲ」が好評である。確かに今日の日本映画の中では異色な存在である。なんといっても舞台が職業訓練校である。わが国で、職業訓練を主題にした映画や小説が公開されたのは初めてなのではなかろうか。すでに観賞された方も多と思うが、「学校Ⅲ」は他の1つのテーマとして『トミーの夕陽』（鶴島緋沙子著）が織り込まれ、全体の構成をさらに感動深いものにしている。なお、シナリオが角川文庫より発行されている。わが国では「職業訓練が知られていない」と言われるが、職業訓練を知っていただく良い機会として友人・知人に勧めていただきたい。

そのすばらしい「学校Ⅲ」をここで下手に紹介するのが本稿の目的ではない。また評論でもない。本稿は山田洋次監督が職業訓練校をどのように見て、「学校Ⅲ」を製作する気持ちになったのかを紹介するものである。山田監督の視点には、われわれ職業訓練に携わっている者が忘れていた大切なことを含んでいると思うからである。

◇

■10月15日『朝日新聞』、「働く力を⑤」より

①1つの専門校にはいろんな教室があるが、若い人たちのに比べると、中高年の教室はものすごく真剣なのが特徴でした。子どもがいる、生活がかかっている、……こん身の力を込めた勉強ぶりは迫力があって圧倒された。あの教室は出世競争をやめる覚悟のできた人たちの集まりだった。それがゆとりにつながって、人を好きになる気持ち、人を思いやる心が生まれてくる様子がわかった。中には企業戦士

から転換できなくて苦しむ人もいるようですが。

②あの学校が唯一の救いかどうかはわからない。でも、この不況時に需要が増していることは間違いない。難しい勉強をするのもつらいけど、この教室に入れない人が何倍もいるのだ、ということが映画を作りながら、引かかっていた。学力で選考に漏れてしまう人も大勢いるだろう。

③授業料はなく、交通費や手当が出たからこそ、映画で大竹しのぶさん演じる母子家庭の主人公も通うことができた。失業して困ったとき、再就職のために無料で一定期間勉強させてもらえる学校は、社会に必要だろう。

■『学校Ⅲ』（パンフレット）より

④昨年春にNHKの『われらの出発』というドキュメンタリー番組を見て、この学校（技術専門校）のことを知ったのです。50歳前後、あるいはそれ以上の人が小さな教室に集まって、生活をかけて真剣に勉強している姿を見て、いろんなことを感じました。年齢こそ50歳以上の高齢者だけど、1つの教室で、同じ秩序を守って勉強するとすれば、もうこれは立派な『学校』ではないか。……それで、この教室を描いて、未来に希望を持ちうるような映画を作り、この大不況時代に不安を抱えながらも懸命に生きるおじさんたちにエールを送ろう。今、作るべき、今でなければ作れない映画を、という思いで製作にかかりました。

⑤それぞれに違った人生を歩み、背負っている文化も違う人たちが、新しい人間関係を築く場所が学

校である。前2作の夜間中学も特別養護学校も競争社会ではない。そこに学ぶ人たちは競争社会からの落ちこぼれだが、競争のない学校でこそ心を解放させ人間らしいつながりを得ている。今回の技術専門学校にも競争はない。資格を取るという目的に向かって一緒に学んでいるから、共に学ぶ仲間に対して優しくなれるし、困ったことがあると手をさしのべてやる。そこにこそ教育の場のあるべき姿があるんじゃないでしょうか。

未来はたまたま不安な今の日本です。でもこの映画の登場人物たちは教室で勉強しながら、時としてはほほえんだり、あゝ、俺は今幸せだ、と思う瞬間をもったりするんです。その部分をこそ描きたい。

『シネ・フロント』264 1998 OCT より

ボクは職業訓練校というのは最近まで知らなかったのですよ。知らない人が多いんじゃないですか。……公営で高齢者を主な対象としたこういう学校があるのは知らなかった。

だから、これはほかのタイトルをつけてもよかったんですよ。でも、この話は『学校』パートとしても成り立つだろう。それだったら企画としては、そのシリーズの一環として作ったほうがいいと思ったわけね。

こんどは先生がすこし引っ込んでいますからね。あの学校は事実としてそういうふうに運営されてるんですよ。

なんだかねで、ボイラー技士の資格試験は合格するんです。授業は難しくて訳がわからなくなるんだけど、車の免許と同じで、ポイントを押さえ、ヤマをかけさせて試験を行うから、みんななんとかパスするわけです。問題は就職なのね。3～4年前まではなんとか8割から9割、就職できていたそうです。しかし、去年あたりは就職率は5割になっちゃったといえます。……映画ではだいたい就職できたことになっていますが、現実には映画よりすこし厳しいようです。

(でもラストのあたりにくると、見ていてなんとかなるんじゃないかと思えるんですね。)

そう見てほしいのね。彼女は乳ガンになって手術

室に入るとき、見舞いにきた職業訓練校の同窓のオジさんたちに自分の身を委ねようと思うし、オジさんたちも委ねられることによって、なんとかしてやろうという気になる。僕は人間社会とはそういうふうにはできていると思うんですよ。

『プレジデント』1998年11月号「本当の勝負時を迎えるために今、やっておくべきこと」より

この映画は職業訓練校が舞台になっているんですが、実はヒントになったNHKのドキュメンタリーがあるんです。職業訓練に高齢者教室というのがあって、そこでは50歳前後の人たちがビル管理会社で働くべく、ボイラー技士の資格を取るための勉強をしているんですね。

そこには大企業をリストラされた人もいれば、町工場経営者や職人上がりもいる。そのドキュメンタリーでは、一流企業のバリバリの営業課長だった人と革のなめし職人の2人に焦点を当てているんです。職人さんは計算とか化学記号とかが苦手だから、見かねて営業課長さんが教えてやることになる。職人さんが無事試験に合格して、営業課長さんに電話しながら涙ぐむんですね。「ありがとう。あなたに真っ先に知らせたかったよ」。見ていて実に気持ちいい友情関係なんです。ドキュメンタリーでは私生活を撮っているところもあって、それを見ると、職人さんのほうが生活の中身が豊かなんですね。もちろん経済的には貧しいんだけど。

(職人さんのほうは)魚釣りやカメラが好きで、料理も上手と、多趣味なんです。倅は高卒でもう就職していて勢いがよくなって、親子も仲がいい。一方の元課長さんは、もう典型的な小市民風の暮らしで、息子も大学の受験勉強をやっている。比べてみると、職人さんのほうがどう見ても楽しく生きているのですね。

評論や監督がほとんど取り上げていないが私が感心させられたセリフは、元部長がリストラに会い、友人にも冷たくあしらわれて憤慨し、酔いつぶれて予備校生の息子に話すときである。「お前が

コックになりたいと言ったとき、大学だけは出ると言ったが、なぜあんなことを言ったか後悔している。大学を出てサラリーマンになるだけが能でない」と。実はこの言葉をはいた次の日から、元部長は心を開いて訓練校の仲間たちとも溶け込むのである。このような意識を持つことの重要性を山田監督は語らせている。

以上の紹介のように、一般の人々が気づかない点に鋭く注目されていることがわかる。さすがに芸術家だと思ふ。やにもあるように、「職業訓練校も学校の1つと考えたい」とする見方も多くの日本人にはない視座であり、まず敬意を表したい。ただ残念ながら、しかしやむを得ないことと思ふが、この「学校」と「職業訓練校」との関係のとらえ方に私としては不満が残った。この視座は日本的教育観、学校観が前提になっている。本来は「学校」が取り上げた職業訓練校のような教育訓練的営み

が、「庶民の学習施設としては」という限定が必要ではあるが、本来の学校であったはずである。このような見方については、日本人の編集した英和辞典ではなく、英米人の編集した英英辞典でEducationの意味を見ればおわかりいただけるはずである。

「学校」は離転職者訓練を主題にしているため、監督の若年者訓練に対する見方はやや辛い。“進学”のための知識のテストで“落ちこぼし”された子どもたちが、進学校とは異なる職業訓練校において、自分の職業的自立をめざして生き生きと学習しているのも事実である。中学で登校拒否児であった生徒が職業訓練校で皆勤賞を取り、修了後も勉学に意欲を示している例も少なくないのである。

いずれにしろ、「学校」により職業訓練は今後注目されるだろう。今、「学校」を超える職業訓練の実践が求められているといえる。